

報告

2021 年度若手奨励賞選考について

若手奨励賞選考委員会：飯塚礼子、岡村定矩、柴田晋平、鈴木文二、
嶺重 慎（委員長）、山根弘也

1. はじめに：選考の経緯など

2021 年度若手奨励賞の応募要項は、2020 年度第 4 回臨時代議員総会（2021 年 5 月）において審議・了承され、『天文教育』誌 2021 年 7 月号に掲載されました（その後、本会ウェブに掲載され、tenkyo ML でも配信されました）。応募は 2021 年 9 月末日で締め切られ 4 件の応募がありました。いずれも個人への推薦であり、被推薦者は男性 2 名、女性 2 名でした。

選考委員会は、2021 年 10 月 24 日（日）にオンラインで実施しました。審査に先立ち、以下の事項を確認しました。

- (a) 応募書類（推薦文）はあくまでも参考資料であり、選考委員会はそれを元に独自の選考理由書を作成して代議員総会に提出すること。
- (b) 「どういう活動に賞を授与するか」という、いわば「賞の性格づけ」に関して、内規では明確に定められておらず、本委員会の裁量であること（事前に明確に定めていないのは、想定外の新規性あふれる活動に関する応募を排除しないため）。委員会はどういう方を受賞候補者として推薦するか、その結果でもって賞の性格を明らかにすること（したがって、賞の性格が固まるには数年かかる）。

その後、委員会では、各候補者につき、新規性・独創性・発展性、および天文教育・普及活動全般へのインパクトなどの評価を行いました。それを元に討議した結果、

前田昌志氏（三重大学教育学部附属小学校）
三浦飛未来氏（インター宙ぼレーション）

の 2 名を最終候補者として代議員総会に推薦することを決定しました。そして 2021 年度第 2 回臨時代議員総会（2021 年 11 月）において上記 2 名への授賞が決定しました。

なお選考委員会では、代議員総会での決定の後、被推薦者に「この点は高く評価されたが、この点が懸念事項として指摘された、今後こういう活動を期待する」といったフィードバックメッセージを送っています。

以下の選考理由書は本人による事実確認を経て、本会ホームページで公開しているものです。なお推薦者が委員会に提出した前田氏への推薦文では、氏が本会の理事であることが推薦理由の一つでしたが、委員会の選考理由書では削除しました。その理由は、(1)「執行部に入れば受賞の機会が増す」といった誤ったメッセージを出さないため、(2) 本会の外部に対し、「本賞は日本の天文教育普及の発展ではなく、本会の発展を目指した内向きの賞ではないか」との疑念を与えることを避けるため、この 2 点です。

2. 選考理由書

2.1 前田昌志（マエダマサシ）氏

年齢：29 歳（2021 年 7 月 1 日現在）

所属：三重大学教育学部附属小学校

授賞対象となる活動：小学校教員としての卓抜した天文教育・普及活動への貢献

前田昌志氏は、大学在学中に定期観望会を立案・実施したことを皮切りに、小学校教員として、ユニークな天文教育の実践を精力的かつ継続的に行ってきた。学生時代から実践のみならず報告にも熱心で、在学中の定期観

望会については、すでに学生時代から本会の年会において発表を行なっている（この観望会は大学の後輩に受け継がれ、現在も継続している）。卒業後、松阪市内の小学校教員として着任し、天文クラブを立ち上げたほか、地域に根ざした観望会を開催した。その後、三重大学教育学部附属学校に着任してから氏の活動は大きく幅を広げることになる。すなわち、プログラミング教育、STEAM 教育、ドローン・VR・社会的対話ロボットの教育利用など、他分野の教育実践活動などで使われてきたツールを次々と天文教育に応用するなどして、先進的な取り組みを精力的に実行している。

その一例を紹介すると、**Stories of Tomorrow** という天文教育を核にした国際的な小学校 STEAM 教育の試験的実践が挙げられる。氏はこのプロジェクトに、日本から参加の 2 校（三重大学教育学部附属小学校と和歌山大学教育学部附属小学校）のうちの 1 校を代表して積極的に取り組んだ。さらに、その時の実践を発展させて、プログラミング教育や国際理解教育を展開するなど、教育における現代的課題に果敢に挑戦している。

この例からも明らかなように、氏の活動範囲やそのまなざしは日本に閉じることなく、広く世界に向けられている。氏は IAU OAE（国際天文学連合 教育のための天文学推進室）の組織員として、日本の天文教育コーディネーターとしても活躍中である。それら数多くの実践は、本会の『天文教育』誌などでも報告されている。天文教育の未来を担うリーダーとして今後の一層の活躍が期待される。

大学附属学校という恵まれた環境において行われた先進的な実践、と捉える向きもあるかもしれないが、校内にとどまらず、その成果を多くの団体と共有し、形を成して発表していることは高く評価できる。

教育の現代化が叫ばれて久しい。官庁は未

来の森を見て夢を語るが、現場は一本の木を育てるのに必死である。両極で疲弊しているのは、子どもたちの成長を確かな手応えとして感じられる実践があまりにも乏しいからである。そのような時代にあって、前田氏の先進的で卓越したアイデアを実現した実践は、今後、全国のアスリート教育の現場でさまざまな評価がなされ、議論を巻き起こしていくことだろう。そしてその議論の中で、「行動する原動力は何か」「天文教育はなぜ必要か」という原点が問われていくに違いない。氏が、今後も継続して、自らの手で、実践の上に立った天文教育をさらに進めていくことを願ってやまない。

以上の理由により、前田昌志氏に、2021 年度日本天文教育普及研究会 若手奨励賞を授与する。

2.2 三浦飛未来（ミウラ ヒビキ）氏

年齢：24 歳（2021 年 7 月 1 日現在）

所属：インター宙ぼレーション

授賞対象となる活動：気仙沼星空観望会を始めとする天文普及活動

三浦飛未来氏は、自らの努力と独自のネットワークの活用により、広報を駆使して精力的に教育普及活動を行っている若手である。三浦氏は、大学生時代から天文教育普及に強い関心をいだき、様々な研究会に参加し勉強している。また、人に届くような言葉を伝えるコミュニケーション手法を得るために、学校にも通い常に向上に努めている。さらに若手の研究者、天文普及に携わる方々とのワーキンググループも設立し、活動を進めている。なお 2020 年度には国内研修支援金を得て内地留学をし、銀河相互作用に関する研究をしている（『天文月報』2021 年 11 月号に報告記事掲載）。

今回、受賞の対象となった「気仙沼星空観望会」は、三浦氏のそうした活動背景をふま

えて実現したものといえよう。氏は、震災から10年であること、および母校である気仙沼の小学校が統廃合されることをきっかけとし、「気仙沼星空観望会」を企画し、2021年8月13日に実施した。イベントの目的は、統廃合される小学校の児童に対し、観望会を開催することで思い出づくりをすること、三浦氏が子ども時代の夢を叶え、天文に関する仕事に（プラネタリウム解説者）従事できたことを伝えることで、子どもたちに夢と希望を与えること、さらに全国的には気仙沼と言う地の利を使うことにより、天文普及活動をPRすることである。

イベントでは「宇宙×夢」をテーマに掲げ、事前に小学校の全児童を対象とした特別授業も数回実施し知識導入を行った。そのため三浦氏は、イベント開催前の約1年前（2020年9月）から天文系の大学生・大学院生を中心とする実行メンバーを集め、実践を経験させる場を持つことで普及者の育成を行った。活動資金を得るために、天文学振興財団のスター・ウィーク2021協力イベント助成金などの補助金を調達し、不足分はカンパとスタッフの自弁でまかなった。イベントの教材・広報物作成は地元企業を利用し少額ではあるが地元へ寄与した。広報は、コロナ禍での事業であったため気仙沼内に絞り、地元メディア（気仙沼地域のラジオ番組「ラヂオ気仙沼」）や公的配布物（公民館だよりなど）に取りあげられた。終了後は『星ナビ』などに報告記事を書いている。

イベント内容は、宇宙・天文業界で活躍する研究者の講演会、星座早見盤作成のワークショップ、画像・映像による星空体験である。当日は悪天候で観望会は中止となり、参加人数は36名と決して多くはなかったが、トークショー、ワークショップ、観望会を組み合わせた大変充実したイベントであったと評価できる。

以上、資金・仲間集めから広報まで、活力を持って主催した点、大規模なものではないものの天文普及の原点とも言える形の取り組みを貫徹した点、従来ある市民への天文普及の形を継承しつつメディアなどを活用して天文普及を行うことにより、天文・宇宙への興味を一般市民へ印象づけた点は高く評価できる。また、積極的かつ継続的に天文普及活動に取り組む様子が伺えることも頼もしい。三浦氏が係わる活動を支えるコミュニティが、どこまで充実していくか、楽しみでもあり、そこに課題もある。草の根から行政を突き上げる、行政が支援をしなくなる地域活動として、全国展開を目指さず普及活動の一つとして注目したい。今後、さらに新しい普及方法を開拓する技能も含め、若手のリーダーとして天文普及に貢献し若者を牽引していくものと大いに期待できる。

以上の理由により、三浦飛未来氏に、2021年度日本天文教育普及研究会 若手奨励賞を授与する。

3. 代議員総会で出された意見・コメントへの返答

2021年度第2回代議員総会においては、代議員のみなさまから、多くの意見やコメントをいただきました。以下、来年度以降の選考に関わる長期的部分に関して、委員会の見解をまとめました（すでに代議員あてに返答したものと基本的に同じですが、表現の補足や省略をしたところがあります。）

以下の返答に対しさらにご意見もあるでしょう。そこで代議員総会に「意見募集」の項目に入れていただくことにしています。会員のみなさまも、代議員を通じてご意見をお願いします。なお、以下の文章は今後も長らく参照される可能性がありますので、代議員の個人名は伏せてあります。

3.1 選考委員の権限について

まず、大事なこととして指摘しておきたいことは、選考委員会の権限（あるいは裁量の範囲）についてです。選考委員は、2021年8月の代議員総会での選考委員承認を経て、本会からの委託を受けて選考にあたっている、というのが選考委員会の認識です。すなわち、会員は、選考委員に業務を委託している形になります。

代議員から次のような要求やコメントが出されました；

「受賞者2件と落選者2件の評価の間に明確な差があったものと推察します。しかし報告書からはそれを読み取ることができませんでした…例えば

…全4件についての選考委員会の「評価シート」の結果を示す

…委員会の議論の結果、何をもって評価を分けたのかを具体的に説明する

…応募者（推薦者）へフィードバックするメッセージの内容（案）もご報告いただくなどをしていただくことはできないでしょうか。」

「推薦書に記載のなかった活動を選考理由に含めるのは賛成しません。これは本件に限りませんが、選考委員がよく知っている候補者に（意図しなくても）肩入れすることになりかねない（あるいはそのように見られかねない）ことを危惧します。」

「推薦文を修文しての受賞というのは違和感を感じました。受賞者ありきの選考のようにとらえられかねません。」

これらの記述は、煎じ詰めれば、「選考委員にはまかせておれない」「信頼できない」「自分が判断する」と言っていることと同じであると、選考委員会では理解しました。もしこの見解が、代議員総会として共有されるならば、とても選考委員はその任にあたれないことになります。この点について、代議員総会

としてしっかりと議論して、結論を出していただくことを要望いたします。

また、選考理由書は選考委員会が作成して代議員総会に提出するものです。選考委員会に提出される推薦文はそのための重要な参考資料ですが、推薦文の全ての内容が選考理由書に含まれるわけではなく、また推薦文に記載されていない事柄が選考委員会の調査によって含まれることもあります（3.2節で詳しく述べます）。

今回のような顕彰だけでなく、入試や人事選考など、機密性の高い判断が求められる場面では、組織が少人数メンバーに業務委託してを進めることが社会的通例だと選考委員会では認識しています。これは組織に属するメンバーが、選考にあたる人を信頼することによって初めて成り立ちます。「代議員全体で応募・選考情報を共有すればよいではないか」というご意見があるかもしれませんが、それは機密情報保持の観点から実現が難しいと思われます。30名を超える代議員全体で、極めて機密性の高い情報を取り扱うことの難しさは、代議員の皆さんにも同意いただけるものと思います。

確かに、人間のすることなので、選考委員会の判断に偏りが無いとは言い切れません。そのために選考委員は一期（2年）ごとに順次入れ替えることが定められています。また、対象となる活動に時限は設けていませんので、選考委員が入れ替わるごとに応募や推薦をし直すこともできます。仮に短期的に選考委員会の見解に偏りがあっても、長期的には是正されるような制度設計になっているのです。

3.2 選考理由書について

「受賞理由文にはいささか引っかかるころがあり、もうすこし受賞者本人と記述を詰めたほうがよいのではないか」といった発言

がありました。3.1 節冒頭に挙げたご意見も含め、選考委員会の見解を述べます。

一般論で言えば、「賞」は設立した人／団体（授与者）が、それにふさわしいと判断した人に、顕彰の対象にした理由とともに授与するものだとして理解します。理由書の文章量はさまざまです。有名な賞ほど表にでる（みんなに広く読まれる）受賞理由は短いです。ただし当然裏には詳細なものがあります。

<https://www.nobelprize.org/prizes/physics/>
<https://gruber.yale.edu/2021-gruber-cosmology-prize>

https://www.kyotoprize.org/laureates/james_gunn/

一般に選考は推薦に基づきますが、授与する主体は授与者なので、理由書はあくまで独自に（授与者が設置する選考委員会の推薦に基づき、意志決定組織で決定したものを）つくるのが筋です。推薦文の通りに書くのはむしろ不適切といっても良いかと思えます。

したがって、理由書に書かれていることを推薦者や受賞者がどのように思うかは、（あえて言えば）選考委員会（とその結果を承認した授与者）とは関係ありません。もし受賞者からのコメント（事実誤認以外）で選考理由書を改訂するようなことになれば、（原理的に）受賞者が自分の意図で受賞の意義を操作できることとなります（語弊を恐れずに言えば「御用学者」ならぬ「御用賞」になります）。これは絶対に避けるべきと考えます。

3.3 各 論

3.1 節、3.2 節をふまえて、出された意見・コメントに対し個別に返答します。

（ご意見）推薦者についての情報も差し支えない範囲でご報告いただけないでしょうか。

自薦／他薦の別、推薦者名など

（返答）この種の情報は一切オープンにすべきではないと考えます。それは、応募者／推

薦者を保護するためです。応募／推薦には勇気がいります。応募者／推薦者が、応募／推薦によって他から批判を受けることを恐れる心理は十分に理解できます。しかし、その思いのあまり応募／推薦に二の足を踏むことは避けないとはいけません。情報が拡散する可能性を排除し、安心して応募／推薦していただくべく状況を整えることは、選考委員会の重大な責務です。その意味で、応募／推薦に関わるいっさいの情報はトップレベルの機密情報として厳重に管理すべきと考えます。

（ご意見）選考に漏れた方も高いレベルだったとのことです。…一度選考に漏れた方は、次の年に自動的に候補者として選考されるようにしてはいかがでしょうか？毎年推薦書を書くことは応募の敷居を高くしてしまいますし、日本天文学会の天文教育普及賞がこの方法で選考しています。

（返答）ごもっともな意見なのですが、今は見送りたいと考えています（将来的には議論が必要でしょう）。その理由は大きく二つあります。（1）若手ですから、年々、活動内容を発展・深化・広域化していくことが十分、期待されます。毎年同じ内容でよい、というのは、若手を対象の賞としてはあまりふさわしくないように思います。なお、日本天文学会の「天文教育普及賞」は、受賞者・団体をみるかぎり、すでにエスタブリッシュした方ないしは長期の取り組みを顕彰するもののように見えます。同じ日本天文学会の賞でも、中堅以上が対象の「林忠四郎賞」の応募書類は2年間有効ですが、若手が対象の「研究奨励賞」は毎年の応募となっています。（2）惜しくも受賞に至らなかった方には、フィードバックとして「この点をさらに発展させてはいかがでしょうか」という具体的提案を送付しました。このプロセスはとても大事と考えます。このようなフィードバックを参考にさらに活動を広げて、再チャレンジしていただく

ことを期待します。

(ご意見) 若手のよい点を評価し、エンカレッジする賞かと理解しておりますが、審査項目に「評価できない点(弱気や気になる点)」を含める必要はあったのでしょうか?

(返答) 世の中に完璧な活動や成果はなく、どこか弱点があります。それがだめなのではなくて、そこに活動展開のチャンスがあります。選考委員会で送付したフィードバックには、個人の努力でいかんともしがたい点については触れません。そうではなくて、「この点に留意してはどうか」という具体的改善案を提示しました。それは長期的には、若手をエンカレッジするものと考えます。

このような評価の仕方は、(天文学研究における)プロポーザル審査において広く行われていることです。惜しくも採択にならなかった方は、そのフィードバックをみて、次回どの点に留意すれば可能性が広がるのか、努力すべき方向性を学ぶことができます。これがコミュニティ全体の活動を活性化する大きな原動力になっていると思います。そのやり方を踏襲したものです。

(ご意見) 代議員・年会実行委員としての活躍ぶりも削除されています。今回の受賞者のうちの1名はそれがなくとも十二分に活躍されていますので、今回はともかくとして、今後、もし本会を足場とした活動も対象外とするのだとしたら、疑問が残ります。

(返答) 今回の審査で委員会活動等を対象外としたではありません。委員会活動に言及する必要がなかったため、「選考理由書」に記載していないだけです。では今後はどうなのか、この点についてはすでに代議員(1名)から適切な考えが表明されました。すなわち(一部引用します)

『その人じゃなければ実現しえなかった』ものであったのならば、受賞理由となりうる」選考委員会の意見も同様で、委員会やWG活

動の内容を選考理由書に入れるかどうかは場合によるというのが結論です。一律に「入れるべき」「入れるべきでない」と線を引くことはできません。

(ご意見) 今回の受賞者をこの2名とした理由をもう少し明確に示していただけないでしょうか。…推薦数4件のうち2件を受賞者とするのであれば、受賞者2件と落選者2件の評価の間に明確な差があったものと推察します。しかし報告書からはそれを読み取ることができませんでした…。

(返答) 選考基準は、応募要項にある「活動や教材の内容の説明に加え、特色(独創性、新規性、発展性、波及効果など)をわかりやすく記述してください」に準拠しています。これらの特色を総合判断した結果をご報告しました。

3.1 節にも書きましたように、議論の詳細に関しては一切、公表しかねます。今回惜しくも受賞に至らなかった応募者(被推薦者)のプライバシーに直接かかわることで、これをオープンにすることは「人権上、危険な行為」とすら言えると思います。これは当人の氏名を伏せても全く同じです。今回の応募は、それぞれユニークな活動であり、氏名を伏せてもすぐに誰か推察できます。逆に、誰がやっているのか特定できないような活動は、そもそも受賞の対象になりませんし、そのような応募は一つもありませんでした。

(ご意見) 被推薦者の生年月日、性別(文中)については、報告の必要は無いように思います。

(返答) 生年月日については、ごもっともな指摘なので選考理由書では削除しました。性別については選考委員会の姿勢として入れておくべきと思っています。現時点での日本社会の「ジェンダー」に関する諸般の状況を見ると、入れないよりは入れておく方が、社会状況を一步前に進めるのに役立つと思います。

仮に「男性 8 名、女性 1 名」のような状況であったとしたら、それを公表することでさまざまな議論が起きる可能性があります。広く議論と対話を重ねる訓練を国民の隅々から実行することが大事だと考えます。「被推薦者は 9 名だった」では議論のきっかけが出てきません。

4. おわりに

上記の返答に関するご意見のほか、今後の選考のあり方全般においてコメント・ご意見がございましたら、代議員総会においてご意

見をお願いします。

最後に蛇足ながら一点付け加えます。今回の応募は 4 件でした。が、潜在的には、まだまだ多くの受賞候補者が埋もれていると感じます。さらに応募数を増やすことこそ、日本の天文教育普及活動の活性化に必要ではないかと考えます。

会員のみなさまにおかれましても、今後も、一層の働きかけをお願いします。また、応募数を増やすためのアイデアがありましたら、ぜひ、ご提案ください。

* * * * *